

目的 被服の美しさを考えるとき、デザインの効果やシルエット上の効果を目的として、地の目にとらわれることなく構成されることが多い。フレアスカートもそのような織物の性質を効果的に利用した衣服の一つである。自重により、たて糸・よこ糸の交差角が変化し、美しいシルエットを作り出すが、布の形状変化は中方向の寸法不足や裾線のみだれなど構成上の問題となる点も多い。このような織物の幾何学的な構造変形に伴う織物の形状変化や寸法変化は、一般にバイヤス方向において著しく、また被服材料の力学的性質による影響も見逃すことができない。構成上への扱いは豊富な経験が要求されることが多い。そこで本実験においては、自重による織物の幾何学的な構造変形に伴う織物の形状変化や寸法変化について説明するため、まずフレアスカートの変形の実態について調べた。

方法 わらかじめたて糸方向・よこ糸方向に10cm間隔に格子状の基本線を記入した平織布を試料とし、前後中心が正バイヤスの180°サーキュラースカートを製作し、各部分におけるたて糸・よこ糸の交差角の変化と寸法の変化を測定した。さらにスカートの長さを変化させた場合の影響、被服材料の差による影響についても調べた。

結果 いずれも前後中心付近における変化が著しく、布の自重による影響の少ない裾線付近や縫目・ベルト付近における変化は少ない。また変化の状態はスカートの長さによっても異なり、布の力学的性質の差による影響も大きいことが認められた。